

モンゴル民族の婚姻儀礼に関する考察
—— 内モンゴル自治区通遼市ホルチン左翼中旗の事例を中心に ——

韓 艶麗

Mongolian marriage etiquette
—with special reference to Horqin Left Middle Banner, Tongliao, Inner Mongolia
Autonomous Region—

Yanli HAN

Abstract

This paper discusses the transition of social position and other factors on Mongolian marriage rituals. To investigate the transition from the 1920s to the 1990s, we refer to Hurirand and Aoki's research on marriage rituals in the 1920s and betrothal gifts from men to women - an important factor of the marriage ritual in the 1940s. We discuss and analyse rituals from the 1950s to the 1990s based on a hearing survey conducted mostly in Inner Mongolia. The results show that there is no significant difference in marriage rituals between the 1920s and the 1950s. However, the popular betrothal gifts from men to women shifted from livestock between the 1920s to the 1940s to money or cloth after the 1950s, showing how the life of Mongolian people had changed from purely nomadic to a mixture of nomadic and farming.

By investigating four aspects of marriage rituals between the 1950s and the 1990s, we found out that wedding receptions play an important role in society at all times since a large amount of money is spent on them. Mutual cooperation between villages can also be seen at the receptions. Studying them from four different aspects, we can see the changes had been brought about by the economic improvement of farmers lives caused by land policy. The change in the role of the parents in the marriages is also a very important factor. The parents sense of values has gradually been freed from old and traditional values not only because of economic improvement but also by improvements in lifestyle and the effect of the media.

キーワード：1. モンゴル民族, 2. 婚姻儀礼, 3. 半農半牧地域

Key Words : 1. Mongolian people, 2. marriage etiquette, 3. Semi-nomadic areas

日本語要旨

本稿の目的は、モンゴル民族の婚姻儀礼の社会における位置づけ及びその各要素の変化の要因を検討することにある。1920年代から1990年代までのモンゴル民族の婚姻儀礼の変化を検討するために、1950年以前の婚姻儀礼については、フリーランドの1920年代の婚姻儀礼に関する研究及び青木富太郎の1940年代の婚姻儀礼の重要な要素となる結納品に関する研究を参考にする。そして1950年代から1990年代までの婚姻儀礼に関しては、内モンゴル自治区通遼市ホルチン左翼中旗を中心に実施した調査資料により記述・分析する。その結果、1920年代から1950年代までの婚姻儀礼につい

ては、その基本的な流れに変化が見られないが、婚姻儀礼の中で、男性側から女性側にあげる結納品についてみると、1920年代や1940年代の方が明らかに家畜の種類が多いことがわかる。反対に、1950年代以降は現金や洋服の布が圧倒的で、家畜は少ない。半農半牧地域のモンゴル民族においては家畜の数が少ないので、結納品が現金や物になったが、それは遊牧生活様式から半農半牧生活様式に変化した結果ではないかと思われる。

また1950年代から1990年代までの婚姻儀礼の連続性を4つの側面で考察した結果、どの年代でも結婚披露宴に相当なお金をかけて実施しており、社会的に重要な位置を占めている事が明らかである。そしてそこに、村全体の互助関係を読みとることもできる。さらに、婚姻儀礼の変化を4つの側面で考察した結果、1980年代の土地政策により、農民たちが経済的に豊かになったことと大きく関係していることが分かる。また、婚姻に対する親の関わり方の変化の説明としては、経済的な変化だけでなく、メディアの影響や生活レベルの向上により、古い価値観や伝統的な価値観から次第に自由になったことも重要な要因としてあげられる。

1. はじめに

最近の10数年、中国の急激な経済発展とともに、社会環境の変化、生活様式の都市化、民族習慣の変化等をもたらしている状況が見られる。モンゴル民族は、世界の人々に遊牧民族として知られている。しかし、遊牧民族であったモンゴル民族は、現代社会の発展とともにただ生活の変化だけではなく、諸方面で民族文化の変化をもたらしている。筆者は、2012年故郷のオルトマンハ＝ガチャーにおいて婚姻儀礼を行なった経験から、筆者自身が1990年代に参加したことのある婚姻儀礼と現代の婚姻儀礼は、かなり変化していることを実感した。それゆえ内モンゴルのモンゴル民族の婚姻儀礼を一例とし、その連続性あるいは変化について検証していきたいと考えている。

本稿では、1920年代から1990年代までのモンゴル民族の婚姻儀礼の連続性及びその変化を検討するために、まず、フリーランドの1920年代の婚姻儀礼に関する研究と青木富太郎の1940年代の婚姻儀礼の重要な要素となる男性側から女性側にあげる婚資に関する研究を参考にする。次に、1950年代から1990年代までのモンゴル民族の婚姻儀礼については、内モンゴル自治区通遼市ホルチン左翼中旗を中心として聞き取り調査を実施する。

以下では、以上の先行研究及び聞き取り調査を鑑み、モンゴル民族の婚姻儀礼が当時の社会に一体どのように位置づけられているのか、そしてまた、各要素の変化の要因を検証する。

2. 調査地概要

内モンゴル自治区は中国北部に位置し、118.3万平方キロメートルの面積で、新疆ウイグル族自治区、チベット自治区に次ぐ中国三番目広さの地域である。内モンゴルの東部は、主に通遼市、赤峰市、ヒンガン盟を指し（p82の地図1を参照）、そこをホルチン地域ともいい、16世紀の中頃からホルチン部族がそこで遊牧し、17世紀の初頭頃に、満州人の統治下に入り、ノルハチの清朝政権建設の戦略的なパートナーとなり、後に皇室と頻繁に婚姻関係を結ぶようになった。その中で、ホルチン左翼中旗は、清代にジェリム盟（現通遼市）の中で面積が広く、

清朝から高い爵位をもらった複数の王公が居住する旗であり、もっとも清朝の影響を受けた地域である（ボルジギン・ブレンサイン2003）。

現代中国内モンゴル自治区におけるモンゴル民族の生活様式は、概ね牧畜生活、半農半牧生活、都市生活の3つのタイプがある。2005年の統計からみると、中国領内に暮らすモンゴル民族の人口は約480万人で、その中の約403万人が内モンゴル自治区に居住している。東部地域即ち半農半牧地域である通遼市、赤峰市、ヒンガン盟に暮らすモンゴル民族の人口は約286万人。前述の統計から内モンゴル自治区のモンゴル民族の3分の2が東部地域に暮らしている事が分かる。（陶健ほか（編）2006）即ち内モンゴル東部半農半牧地域に暮らすモンゴル民族が密集している事が明らかであり、その中でホルチン左翼中旗は歴史的に非常に重要な地域で、モンゴル民族の居住密度が非常に高いところの一つである。

周知のように、モンゴル民族はゲルに住み、牧業を主とする遊牧民族である。しかし、筆者は本稿で世間の人々にあまり注目されていない半農半牧地域に暮らすモンゴル民族を研究対象とした。2003年のボルジギン・ブレンサインの『近現代におけるモンゴル民族農耕村落社会の形成』という著書をきっかけに、内モンゴルの東部モンゴルに関する関心が高まり、もともと遊牧生活をしていたモンゴル民族はなぜ半農半牧生活あるいは純農生活に転換されたのかという疑問が解明された。筆者の故郷は、ホルチン左翼中旗のバイシント蘇木オルトマンハ＝ガチャーという村で、ブレンサインの研究対象地と同じ旗に位置され、距離的に近い。それゆえ筆者は本稿で、研究対象地の概要をブレンサインの研究を参考することにした。

前述したように、ホルチン左翼中旗は清朝と頻繁に婚姻を結び、清朝の影響を強く受けた地域である。また清朝の1901年「新政（移民実辺政策）」により、蒙地の大幅な開墾を始め、さらに清朝崩壊後、民国初期から「満州事変」まで蒙地開墾は、強硬推し進められた。それゆえ、当該地域に清朝との婚姻による満州族の流入、蒙地開墾による漢民族の流入、漢人、モンゴル民族の土地所有権をめぐる「金丹道暴動」といった宗教団体による土地争いでモンゴル民族の移住等が頻繁であった（ボルジギン・ブレンサイン2003）。ボルジギン・ブレンサインの研究対象地であるランブントブ＝ガチャーは、1919年蒙地開墾により、故郷を追われたランブ兄弟が未開地である土地に移住し、自分の名前から名付けられた村落である。ランブントブ＝ガチャーは現在98%をモンゴル民族が占めているが、前述した理由により、モンゴル民族、満州民族、漢民族により成り立っている。それらのモンゴル民族の人たちは、農業牧業を両立する半農半牧の生活様式をとっている。それは村落に定住式の家を持ち農業をしながら、村落から離れた水草の豊富な場所にトブ（臨時的に作った小屋）を建て牧業をも営む生活様式を指す（ボルジギン・ブレンサイン2003）。このように、東部モンゴルの遊牧生活様式であったモンゴル民族の人々は、多民族を排除することなく多民族を積極的に受け入れ、彼らの移住により様々な文化要素が持ち込まれた。そしてモンゴル社会にその文化要素を絶え間なく浸透させ続けたのである。

上述の内容を鑑み、筆者の故郷であるオルトマンハ＝ガチャーという村も現在98%の人がモンゴル民族であるが、それはもともとモンゴル民族、漢民族、満州民族から成り立っていた。そしてランブントブ＝ガチャーは1919年蒙地開墾により村落形成し始めたので、同じ旗に位置しているオルトマンハ＝ガチャーもその頃に形成し始めたと思われる。

このように多民族より成り立った半農半牧地域のモンゴル民族は、1920年代から1990年まで婚姻儀礼の側面でいかなる変化をもたらしているのかを検討していく必要があると思われる。筆者は、2012年故郷のオルトマンハ＝ガチャーで結婚式を挙げ、実際に婚姻儀礼を経験したことから、1990年代に筆者自身が参加したことのある結婚式の婚姻儀礼と現代の婚姻儀礼が、かなり変化していることを実感した。故に、本稿では1920年代から1990年代までさかのぼって、当該地域におけるモンゴル民族の婚姻儀礼の連続性と変化について検証したい。なお1990年代から現在までの婚姻儀礼の連続性と変化についての考察は今後の課題にしておきたい。さて以下に調査地に関する先行研究と婚姻儀礼に関する先行研究と分類し、それらを概観していきたい。



地図1：内モンゴル自治区の通遼市，赤峰市，ヒンガン盟の位置

3. 先行研究

3.1 調査地に関する先行研究

モンゴル民族は遊牧民族として世界の人々に知られている。それゆえ、前述した内モンゴル自治区の牧畜生活タイプについてのモンゴル民族の歴史、遊牧生活、文化、習慣に関する研究が多数占め、半農半牧生活タイプのモンゴル民族に関する研究は現時点ではそれほど進んでいないと言える。最近の半農半牧地域に関する先行研究をあげれば、ボルジギン・ブレンサイン (2003)、郝亜明・包智明 (2010)、王桂蘭 (2011) 等が注目される。

ボルジギン・ブレンサインの研究については上述の調査地概要でも触れたが、氏の半農半牧社会の形成過程、1920年代から1990年までのモンゴル民族の住居変化に関する研究動向などが注目される。氏はホルチン左翼中旗の地方誌、文献資料をもとに、1998年から1999年まで三回にわたってフィールド調査を行い、歴史学における厳密な考証手法と人類学的手法を結合した。そして主に、ホルチン左翼中旗の蒙地開墾の歴史を乾隆時代にさかのぼって整理し、蒙地開墾の本質を解明し、当該地域の一つの村落であるランブントブ＝ガチャーの村落形成史を取り上げ、農耕モンゴル民族村落の形成過程でモンゴルの伝統的遊牧社会はどのような痕跡を残

してどのような形で受け継がれたかを検証し、農耕モンゴル民族村落社会と遊牧社会との接点を探った。これにより漢人型の農耕社会の影響を強く受けながら形成されたモンゴル社会の特殊性を解明したのである。

郝亜明・包智明は、内モンゴルのホルチン左翼後旗での四つの村落に対し実態調査を行い、1996年と2005年の村落状況を比較し、それぞれ農村村落の社会変化や経済状況の変化を解明している。その各変化は、1980年代の土地改革、1997年の土地改革、2002農民税改革、2005年農民税免除等の国家体制政策と密接的な関係を持っていることを明らかにしている。氏の研究は、1996年から2005年までの10年間の半農半牧地域におけるモンゴル民族の家庭状況、婚姻状況、経済状況、日常生活、文化等変化を充分検討していると思われる。また中国政府の1980年代の土地改革政策により、生産隊の土地が農民たちに均等に分配され、その結果、農民たちの働く意欲が高まり、収入が大幅に増大した。このことは筆者の本研究における1980年代以降の農牧民たちの生活水準上昇の主な原因としてみることもできるとと思われる。

王桂蘭は、内モンゴルの牧畜地域社会のあり方を示すために、半農半牧地域の通遼市のジャールト旗の一つの村落と牧畜地域の赤峰市アルホルチン旗の一つの村落を選び現地調査を実施し、その日常生活、言語使用状況、年中行事、食文化等各方面で比較している。それを国家政策に関連づけて、その生業変化の特徴と文化変容を解明している。王桂蘭の研究は、内モンゴルのモンゴル民族の文化変容はあらゆる方面で表れていることを指摘している。それはあくまでモンゴル民族の全体的な文化変容を取り上げているが、その文化変化の過程や原因については十分な検討がなされていないと思われる。それゆえ筆者自身は、婚姻儀礼に関する体験的知識を踏まえ、1950年代から1990年代までの婚姻儀礼についてはいくつかの世代のインフォーマント本人からのインタビューを通して、半農半牧地域におけるモンゴル民族の婚姻儀礼の連続性及び変化の実態や特徴について解明していきたい。

3.2 婚姻儀礼に関する先行研究

婚姻儀礼に関する先行研究は数多くみられるが、モンゴル民族の婚姻儀礼に関する研究は少なく、フリーランド（1990）、青木富太郎（1952）、策・哈斯卒力格図（2006）などの研究が挙げられる。

フリーランドの研究は1920年前後の西北モンゴルナロバンチン寺領におけるカルカモンゴル社会について述べ、その地域社会集団、生活と技術、血縁組織と財産等について細かく論述している。また1920年代のモンゴル民族婚姻儀礼の制度や儀礼の流れを論じ、当時結婚の前提となる族外婚の規制を分析し、結婚相手同士が知り合う時から結婚までの過程を詳細に取り上げている。当時の婚姻儀礼の流れは以下の表の通りである。

筆者は本稿で、1950年代以降の婚姻儀礼の流れとその各要素について聞き取り調査を行ったが、1950年代以前の婚姻儀礼の流れ及びその各要素を検討するための聞き取り調査については、インフォーマントが存在していないので、前述したフリーランドの1920年代の婚姻儀礼に関する研究は、筆者の重要な参考資料となるとと思われる。

① 男性側は仲人を立て、女性側も仲人を立て、お互いに話し合う。双方の意見が一致したら男性の側から女性の側への訪問について決める。
② 男性の側から女性の方に七種の贈り物をする。
③ 男性の側から女性の方に婚資として主に家畜をあげる。女性の側もそれに相当する贈り物を準備する。
④ 婚資が済んだ後、数か月ないし一年間、婚礼の準備をする。新婦側で宴会をする。
⑤ 新婦を見送る。
⑥ 夫婦の初夜。
⑦ 新婦と両親の離別。
⑧ 新婦の側への訪問。

青木富太郎は、1943年秋及び1944年秋の2回にわたり、綏遠省ウランチャブ盟カルカ右翼旗（現包頭市ダルハン・モーミヤンガン旗）（地図1を参照）で実態調査を実施し、モンゴル遊牧民の婚姻儀礼に男性側から女性側にあげる婚資、結婚後の分家について取り上げた。青木による当時の婚姻儀礼の流れは以下の表の通りである。

① 男性の家長即ち父親は、気にいった女性が見つかるはず占い師に見てもらおう。
② 男性の側から女性側に仲人を行かせる。
③ 男性側の家長の承諾をもらったら仲人により婚資について相談させる。
④ 男性側から婚資をあげる。その婚資の種類は家畜、貨幣、ハダック（絹布）の三種類であり、平民の場合は、馬2頭、牛2頭、羊20頭以下で、非常に貧しい平民はハダック（絹布）だけの場合もある。貴族の場合は、馬2頭、牛2頭、羊20頭、馬蹄銀20個（相当羊20頭）あるいは金100元である。男性側から女性側にこれらの婚資をあげる際、女性側に親戚、友人を招待し、羊肉の塩ゆでと牛乳酒で御馳走してあげる。それは即ち現代の訂婚式（現地では、モンゴル語で訂婚という漢語表現を使っている）と言える。
⑤ 婚資の件が終了後、一年又は二年以内に結婚式を取り行う。結婚が決定後も、結婚相手と面会ができず、結婚式場で初めて面会できる。
⑥ 結婚の日に嫁の持参物は、衣類や頭飾りである。結婚後の2年から3年以内に嫁の実家から、もし貧困な家であれば羊10頭位、富裕家であれば、100頭の馬及び50-60頭の牛をあげる。

青木は、嫁の実家からの持参物を2年から3年後に男性側にあげていたという事実の背後には、当時結婚相手同士が面会もできずに結婚していたので離婚率が高かったことなどについて指摘している。

青木の研究は1940年代の婚姻儀礼に重要なポイントとなる婚資について取り上げているが、当時の婚姻儀礼の流れの全体を提示していない。筆者は、氏の1940年代の婚儀儀礼において男性側から女性側にあげる婚資を、1950年代から1990年代までの婚姻儀礼において男性側から女性側に上げた婚資と比較してみたい。

策・ハス卒力格図は内モンゴルオールドス貴族婚姻儀礼の流れと各地方の平民婚姻儀礼の流れについて取り上げている。氏は、婚姻儀礼の流れや、各習慣や儀礼に使用する言葉を細かく検討している。しかし、婚姻儀礼の流れについては、「昔」や「近代」という年代の不明な言葉を多用し、昔の婚姻儀礼の流れと近代の婚姻儀礼の流れの区別が曖昧になっていると思われる。それゆえ、前述の何れの研究もモンゴル民族の婚姻儀礼が当時の社会に一体どのように位置づけられているのか、そしてその年代ごとの各要素の変化及びその根本的な原因を窺うことができないと思われる。

モンゴル民族以外の婚姻儀礼に関する先行研究は、伊賀上菜穂（2012）、吉国秀（2005）、兼城糸絵（2009）、小坂みゆき（2011）等が挙げられる。伊賀上は、ロシアの結婚儀礼が持つ様々な要素の中で、特に儀礼の参加者の役割に注目し、各集団の役割とその相互作用を分析する事で、ロシア農村社会における個人、家族、親族、農村（地縁）共同体の特徴とその変遷を検証している。また結婚儀礼参加者の役割に見られる変化または不変化の要因としては国家の儀礼政策の影響が大きいことを解明している。ロシアの結婚儀礼の各要素の変化は、国家の儀礼政策との関係が深い。それはモンゴル民族の婚姻儀礼の各要素変化の要因と違うと思われる。ロシアの婚姻儀礼は宗教の影響を深く受けている、しかし、モンゴル民族の婚姻儀礼は宗教的な影響がないと思われる。それゆえ、筆者は年代ごとの婚姻儀礼の流れを綿密な聞き取り調査により、その中の各年代の変化やその要因を検証していきたい。

吉国秀は、中国遼寧省の漢民族の婚姻儀礼の変化の各要素を分析し、参加者の変化により、婚姻儀礼は社会ネットワークの再建に大きな役割を果たしていることを解明している。兼城は、中国福建省における漢民族において現在行われている婚姻儀礼と1949年以前の婚姻儀礼を比較し、経済発展に伴い、漢民族の婚姻儀礼は質素化・簡略化、近代化してきたことを解明している。小坂は中国朝鮮民族の婚姻儀礼の変化を1998年から2009年にかけて比較し、中国と西洋の習慣の導入と韓国からの再導入が行われている現状を述べ、主に朝鮮民族の婚姻儀礼における変化の原因を明らかにしている。吉の研究は、婚姻儀礼の各要素の変化に注目するが、各年代の婚姻儀礼の流れについて述べていないので、婚姻儀礼の流れの全体的な把握ができないようにと思われる。また、兼城や小坂の研究は、各年代における婚姻儀礼に関する聞き取り調査の事例が少ないと思われる。

以上のように、モンゴル民族の婚姻儀礼に関する研究は数が少なく、また、モンゴル民族以外の婚姻儀礼に関する研究は比較的多いが、筆者の調査地域における聞き取り調査に基づいて事例分析はこれまで十分にはなされていない。それゆえ、筆者1950年代から2000年代までの婚姻儀礼の流れと各要素に関して綿密な聞き取り調査を実施し、モンゴル民族の婚姻儀礼が当時の社会に一体どのように位置づけられているのか、そしてまた、各要素の変化の根本的原因は何かということについて検討していきたい。

4. 婚姻儀礼に関する事例

筆者は2013年7月12日から8月31日にかけて通遼市ホルチン左翼中旗地域を中心に、1950年代から1990年代まで、即ち36歳から85歳までの複数の方々に婚姻儀礼の流れ及び各要素について聞き取り調査を実施した。

婚姻儀礼の流れをみると以下ようになる。すなわち、①仲人を立てる。②お互いの両親が面会する。③ゲルをウゾホ（家を見る）④アリヒオールガフ式（お酒を飲ませる式）⑤ウヒンジゲロホ（男性側が女性を借りる）⑥結婚式の日取りを決める。⑦シグソフルゲホ（男性側が女性側に肉、お酒を送る）⑧女性側の結婚式が始まる。⑨女性側の結婚式の夕方に新郎、新婦が餃子食べる。⑩新婦の荷物を整理する。⑪新婦を送る。⑫男性側での結婚式。⑬ウヒントシヤホ（娘を預けてもらうこと）。⑭闇洞房（新婦をからかうことで、現地ではモンゴル語での

会話に漢語からの借用語を使用している)⑮ウヒンイリギホ(娘を見に来る)。

以上の婚姻儀礼の流れの中から、筆者は何人かのインフォーマントに主として以下の項目に関して聞き取り調査を実施した。

- ・結婚相手を知り合ったきっかけ—仲人を通じて知り合ったか、それとも自分たちで知り合ったのか。
- ・アリヒオールガフ式を実施するか否か—それは男性側から女性側に婚資をあげる式で、いわゆる訂婚式である。1970年代までは女性側で実施していたが、その後男性側で実施するようになった。
- ・結婚披露宴の日取り及びその決定方法—田舎ではウゾーチ¹によって結婚式の日取りを決めている。
- ・男性側から女性側に上げたベレグ(婚資)—アリヒオールガフ式に男性側から女性側に上げる婚資を指す。
- ・当時の物価及び年収—1950年代から2000年代までの物価及び家族の年収である。
- ・結婚披露宴に参加した客からもらうお祝い品—結婚披露宴に参加した客は、物をあげていたのか、それともお金をあげていたのか。
- ・当時の婚姻儀礼の基本的な流れ—1950年代から1990年代までの結婚披露宴の流れを指す。

以下に、聞き取り調査した複数の方々中の11人のインフォーマントを1950年代の婚姻儀礼、文革時代(1966–1977)の婚姻儀礼、1980年代の婚姻儀礼、1990年代の婚姻儀礼に分けて、それぞれの事例を提示していきたい。

A) 1950年代の婚姻儀礼

事例1

新郎の楊左義(ヨウ・ゾウイ)は24歳で結婚し66歳で病気により死亡した。通遼市ホルチン左翼中旗バイシント蘇木ホイトデルハンゲル(后徳勝)=ガチャー(地図1を参照)の農牧民である。新婦の邵秀英(タイ・シュウエイ)の結婚年齢は22歳で現在74歳である。通遼市ホルチン左翼中旗バイシント蘇木ホイトデルハンゲル(后徳勝)=ガチャー(地図1を参照)の農牧民である。

事例2

新郎の王西林巴意拉(オウ・シリンバイラ)の結婚年齢は21歳で現在84歳である。通遼市ホルチン左翼中旗バイシント蘇木オリトデルハンゲル(前徳勝)=ガチャー(地図1を参照)の農牧民である。新婦の林六月(リン・ロクガツ)の結婚年齢は17歳で現在80歳、通遼市ホルチン左翼中旗バイシント蘇木オリトデルハンゲル(前徳勝)=ガチャーの農牧民である。

1 ウゾーチは、仏教の背景を持ち、農村地域で人気を集めている占い師である。

事例3

新郎の白敖博（ハク・オボガ）は28歳で結婚し82歳で死亡した。新婦の白玉蘭（ハク・ギョ克蘭）の結婚年齢は18歳で、現在76歳である。通遼市ホルチン左翼中旗バイシント蘇木オリトデルハンゲル（前徳勝）＝ガチャーの農牧民である。

事例4

新郎の韓朝格柱（カン・チョウカクジュウ）は23歳で結婚し、62歳で死亡した。新婦の白龍堂（ハク・リュウドウ）は21歳で結婚し、現在79歳である。ヒンガン盟ホルチン右翼中旗シリガ蘇木ウランイリガ＝ガチャーガダンザラガイイル（地図1を参照）の農牧民である。

・知り合ったきっかけ

事例1 妻の話「1958年に遼寧省のモンゴルジンからホイトデルハンゲルに移住した。そこに移住してから、旦那側から私の家にすぐ仲人を行かせた。それで1959年4月に订婚した」。

事例2 夫の話「私たち二人とも同じ村にいて、当時私はとても貧乏であったため、村の金持ちの地主に傍青²として雇われていた。地主は私のことをとても気に入って、娘と私の婚姻を結ぼうと提案した。そして、地主から私の家に仲人を行かせた」。

事例3 妻の話「私たちは仲人を通して知り合った。当時私はオルトマンハ＝ガチャーにいて、旦那は同じ旗のボハンジョにいた。親戚を通じて、旦那と仲人が私の家に来た。しかし当時は恋人同士の面会を戒めていた。私は窓から陰で見ただけだった」。

事例4 妻の話「私たち二人とも同じ村にいて、旦那の方から私の家に仲人を行かせた」。

・アリヒオールガフ式を実施するか否か

事例1 妻の話「当時経済的に非常に貧乏であったので、アリヒオールガフ式を実施しなかった」。

事例2 夫の話「アリヒオールガフ式を実施した。当時女性側で実施していたので、妻の側に行った」。

事例3 妻の話「アリヒオールガフ式を実施した。当時女性側に実施していた」。

事例4 妻の話「旦那の方でアリヒオールガフ式を実施した」。

・結婚披露宴の日取り及びその決定方法

事例1 妻の話「1959年10月21日は結婚披露宴の日で、ウゾーチによって決めてもらった」。

事例2 夫の話「1950年4月は結婚披露宴の日で、ウゾーチによって決めてもらった」。

事例3 妻の話「1951年12月28日で、ウゾーチによって決めてもらった」。

事例4 妻の話「1954年3月で、ウゾーチによって決めてもらった」。

2 当時農牧業の地主か牧主に雇われていた労働者を指す。

・男性側から女性側に上げたベレグ

事例1 妻の話「ベレグは150元もらった」。

事例2 夫の話「私は妻に牛一頭あげた」。

事例3 妻の話「ベレグは、現金もらわなかった。洋服を作る布を8枚ぐらいもらった」。

事例4 妻の話「ベレグは、400元もらった」。

・当時の物価及び年収

お酒500g 7角，牛一頭70元—80元，当時はあまり買い物をしていなかったの、物価が分からないとう。事例1 妻の郇，事例2 夫の王，事例3 妻の白氏は当時収入なく自給自足と答えた。しかし事例4 妻の白氏は，年収1000元であった。当時家畜いたのか，何匹いたのかと聞いたら，事例4 白氏は「羊，ヤギ60—70頭，牛10頭位いたとっていた」。

・結婚披露宴に参加した客からもらうお祝い品

四組の答えとも同じであった。遠くから来た客は，手ぬぐい，石鹸ケース，洗面器，小柄鏡等をあげ，同村人は何もあげないのが普通であった。

・当時の婚姻儀礼の基本的な流れ

四組の答え同じであったため，以下のようにまとめる。

女性側は訂婚してから，男性側の親戚のために靴をつくり始める。作らないと男性側の親戚に悪口を言われる。そして結婚披露宴が近づくと，男性側から，結婚披露宴の日を伝える。牛車でいき，豚の半分肉か，4分の1肉とお酒³を乗せてシグスフルゲホ⁴していた。女性側に肉が届いたら，結婚披露宴の準備を始める。コック⁵，主宰者を⁶集め，また村から披露宴に使う道具などをも集める。男性の側では掛け布団や敷き布団をつくり始める。二枚ずつか四枚ずつぐらい用意する。そして披露宴の準備をし始める。女性側の結婚披露宴の前日に，新郎と添い婿⁷が新婦側に到着する。そして女性側の披露宴の夜になると，村のみんなが来て，新郎添い婿に歌を歌わせる。そしていろんな冗談したりする。また村のホゴルチン（胡を弾く人）が来てホゴル（胡）を弾いていた。次の朝になると，新郎に新しい服をきかせるのだ，その際，二人のベルゲン（兄の奥さん）がきかせる。この際，新郎の靴を奪ったりする冗談をする。また新郎の帯を赤い布で巻き，その上に，ハダク（白い布）2枚，タバコの袋（当時他人から借りていた）などをかける。こうして，新郎の着替えは終わる。それから新婦側の結婚披露宴が始まる。次の朝に新郎側の結婚披露宴が始まるので，新婦側が新郎，新婦を送るのである。当時新郎，新婦が同じ村人であれば，歩いて送っていた。もし村が離れているのであれば，牛車で送っていた。

3 お酒の量は不明，村の近所でお酒を造っていたので簡単に買えると事例3 妻が言っていた。

4 女性側の結婚披露宴に使う豚肉，お酒を送る，それを送る際に必ず赤い色の細長い布で巻いて送る。

5 村の料理が上手な人が担当するのが一般的である。

6 主宰者は村のいろんな行事を主催した経験があり，主宰する能力がある人であればよい。その役割は，披露宴に来る客の人数を確認し，料理を計画し，茶碗の準備もする。そして結婚当日に，客の席順を決める。

7 結婚披露宴で新郎につく未婚の若い男性の人で，歌，言葉が上手な人が担当するのが一般的である。

B) 文革時代（1966年代から1976年代まで）の婚姻儀礼

事例 5

新郎の包干珠日（ハウ ガンジュル）の結婚年齢20歳で現在65歳，通遼市ホルチン区オルボク鎮（地図1を参照）ツルバンゲル（高林屯）の鉄路局の職員，現在退職している。

新婦の韓七斤（カン チジン）の結婚年齢20歳で現在65歳，通遼市ホルチン区オルボク鎮ツルバンゲル（高林屯），家庭主婦である。

事例 6

新郎の董烏日図（トゥ オルト）の結婚年齢21歳で現在61歳，通遼市ホルチン左翼中旗バイシント蘇木オルトデルハンゲル（前徳勝）＝ガチャー（p 3の地図を参照）の農牧民である。

新婦の王阿拉坦其其格（オウ アラタンチチゲ）の結婚年齢23歳で現在63歳，通遼市ホルチン左翼中旗バイシント蘇木オルトデルハンゲル（前徳勝）＝ガチャー農牧民である。

事例 7

新郎の韓那木斯来（カン ナムシライ）の結婚年齢22歳で現在59歳，現在通遼市ホルチン左翼中旗バイシント蘇木オルトマンハ＝ガチャー農牧民である。

新婦：包双玉（ハウ ソウギョク）。結婚年齢22歳，32歳に心臓病で死亡した。

・結婚相手を知り合ったきっかけ

事例5夫の話「私は17歳の時蘇木の通信員の仕事し，19歳にツルバンゲルの鉄路局に就職した。私たちは同じ村に住んでいて家は，近かった。子供のころいつも一緒に遊んでいた。だから私のことを義理の母が気に入り，17歳の時，仲人を私の家に行かせた。仲人は妻の親戚の姉であった。そして19歳の夏5月に訂婚し，12月に結婚を決めた」。

事例6妻の話「私たちも同じ村に住んでいて，家は近隣であった。当時私は村の教師であり，彼は生産隊で働いていた。だから私は彼の事を気にしていたわけではなかった。しかし彼と彼の家族はみんな私の事を気に入り，私の家に3人の仲人を行かせた。当時私と母は，反対していたが，父と叔父は，彼がすごい働き者と断定し，気に入り，私たちの婚姻を認めた。当時自分の好きな人と結婚できるのは，稀であり，両親の意図で結婚することが多かった。そして21歳で訂婚し，23歳で結婚した」。

事例7夫の話「私たちは同じ村に住んでいて，当時生産隊で一緒に働いていた。そして，私は共産党員で隊長であり，妻は共青団員で副隊長であった。当時お互いに好きになり，20歳で訂婚した。訂婚する際に，私たちの側から村の知り合いに頼んで，仲人を行かせた。当時妻は両親がいないので，反対する人がいなかった」。

・アリヒオールガフ式を実施するか否か

事例5夫の話「アリヒオールガフ式は行われなかった。当時経済的に貧しかったので，そして文化革命時代に賑やかにしたらいけなかったからだ」。

事例6妻の話「アリヒオールガフ式を行った。当時私の経済状況は比較的によかったので行

なった。しかし当時文化革命時代だったので、そんなに賑やかにしなかった。親戚、友人、隣人たちが集まっただけです」。筆者の質問「当時アリヒオールガフ式は女性側に行っていたのか」。事例6妻の話「女性側に行っていた。そして男性側から式に使う豚肉やお酒をもらえた」。

事例7夫の話「事例5夫の包氏と同様にアリヒオールガフ式は行われなかった」。

・結婚披露宴の日取り及びその決定方法

事例5夫の話「1967年12月20日で、ウゾーチの所に行ってみてもらった。当時文革命時代だったので、ウゾーチのことは迷信と言われ、禁止されていたが、陰で見てもらった」。

事例6妻の話「1973年12月10日で、事例5夫の包氏の事情と同じである」。

事例7夫の話「1976年12月14日で事例5夫の包氏の事情と同じである」。

・男性側から女性側に上げたベレグ

事例5夫の話「订婚する際に、彼女に現金500元、洋服つくる布を8枚あげた」。

事例6妻の話「订婚の際、800元と要求したが（当時一番高かったのでみんなびっくりしていた）、結局200元くれた。洋服作る布を3枚くれた」。

事例7夫の話「订婚する際に、彼女に現金700元と洋服作る布を7枚あげた」。

・当時の物価及び年収

当時の物価についての答えをまとめると、卵一個6分、豚肉一斤、3角から5角位、飴一個1分汽車三駅までのチケット6角であった。

事例5夫の話「私は鉄路局職員だったので、月50元の給料をもらっていた」。

事例6妻の話「私は村の教員であったが、給料としての現金をもらっていなかった。でも4元の補助金をもらっていた。一日あたり点数で換算していて、女性は8点、男性は10点であり、秋になると全部を統計してお金で計算してもらっていた。しかし日常の食べ物を生産隊からもらっていたので、秋の収入を計算しても、2元から10元しか残らない。正月の行事を2元でしていたよ。8点や10点はいくらになるかは、全村の収入により計算していた。もし収入がよい年であれば、8点は8角、10点は1元になる。逆だったら、もっと安くなる。収入がない場合、結婚披露宴にかかる料金は、豚を飼って、豚を売ったり、他人から借金したりしていた。当時1000元位で結婚できていた」。

事例7夫の韓氏の答えは事例六妻の王氏の答えとほぼ同じでした。

・結婚披露宴に参加した客からもらえるお祝い品

事例5, 6, 7の答えは同じであった。当時お金をあげる人がほとんどいなかった。物をあげていた。それは、石鹸ケース、手ぬぐい、鏡（当時高級な品になる）などであった。

・当時に婚姻儀礼の基本的な流れ

女性側は订婚してから、男性側の親戚に靴をつくり始める。10足から20足ぐらい作る。作らないと男性側の親戚に悪口言われる。そして結婚披露宴の日が近づくと、男性側から、結婚

披露宴の日を伝えにくる。馬車に四人で行き、馬車に豚の半分肉か、4分の1肉とお酒30斤(15kg)か50斤乗せてシグスフルゲホしていた。女性側にそれが到着すると、結婚披露宴を準備し始める。コック、主宰者を集め、また村から披露宴に使う道具などをも集める。男性の側では掛け布団、敷き布団をつくり始める。2枚ずつか4枚ずつぐらい用意する。そして披露宴の準備をし始める。女性側の結婚披露宴の前日に、新郎と添い婚が新婦側に到着する。当日の夜になると、村のみんなが来て、新郎と添い婚に歌を歌わせる。そしていろんな冗談したりする。豚足の骨でかけまけの遊びをして、負けた方は歌を歌ったりしていた。筆者の質問「当時全部民族歌だったの」事例6の妻「全部民族歌だったのよ。また村のホゴルチン(胡)が来てホゴル(胡)を引いていた」。そして夜10-11時頃になると、新郎、新婦の餃子食べる時間になり、四人座って餃子を食べる。餃子を食べているうちにも、新郎、添い婚のいたずらをする。たとえば、ズボンと式布団を針でくっ付けたり、靴を奪ったりしていた。次の朝になると、新郎に新しい服をきかせるのだ。その際、二人のベルゲンが床に式布団を敷き、上にアワで 卍 という形を描き、新郎を上座に座らせ、着がえさせてあげる。この際、若い人たちが来て靴を奪ったりして冗談する。また新郎の帯を赤い布で巻き、その上に、ハダク(白い布)2枚、タバコの袋などをかける。こうして、新郎の着替えは終わる。それから新婦側の結婚披露宴が始まる。次の朝に新郎側の結婚披露宴が始まるので、新婦側が新郎、新婦を送るのである。当時文革時代だったので、新郎と新婦だけ馬車にのり、他のみんなは歩いて、新郎側に行った。こうして新郎側に到着すると、庭の真ん中の高い位置に赤い布に毛沢東の像をかけてある。すると、毛沢東にお辞儀し、両親にもお辞儀し、村の村長、隊長たちにもお辞儀して家に入り、結婚披露宴が始まるのだ。主宰者は、この時席順を決め、村長、隊長、会計人、民兵連長などの人物は最初の席に座る。それから、世帯ごとに席に座る。披露宴後の夜になると闇洞房(新郎、新婦のいたずら)をする。当時遊ぶ物が少なかったので、新婦新郎の家に鳥を放したり、火の灰を入れたりしていたずらをしていた。

C) 1980年代の婚姻儀礼

事例8

新郎の白六鎖(ハク ロクサ)の結婚年齢23歳で現在55歳、通遼市ホルチン左翼中旗バイシント蘇木オリトデルハンゲル(前徳勝)=ガチャー(地図1を参照)農牧民である。

新婦の呉哈申其木格(ゴ ハソンチムゲ)の結婚年齢24歳で現在56歳、通遼市ホルチン左翼中旗バイシント蘇木オリトデルハンゲル(前徳勝)=ガチャー農牧民である。

事例9

新郎の韓拉拉(カン ラーラ)の結婚年齢23歳で現在50歳、通遼市ホルチン左翼中旗バイシント蘇木オルトマンハ=ガチャー(地図1を参照)の農牧民である。

新婦の包雲良(ハウ ウンリョウ)の結婚年齢22歳で現在49歳、通遼市ホルチン左翼中旗バイシント蘇木オルトマンハ=ガチャーの農牧民である。

・結婚相手を知り合ったきっかけ

事例8 夫の話「私たちは一つの村にいて、生産隊で一緒に働いていた」。

事例9 妻の話「義理の父（韓姓）と私の父（包姓）は異兄弟だったので仲良く交際していた。私が19歳の時に、義理の父は私たちの結婚を申し立てた。すると父は、私たちの婚姻を認めたが、19歳はまだ小さいと言い、訂婚を許したが、23歳に結婚させようということで合意した。当時普通は仲人を通じて知り合うが、もともと親戚なので、親同士が結婚のことについて相談して、仲人を使わなかった」。

・アリヒオールガフ式を実施するか否か

事例8 夫の話「アリヒオールガフ式を実施した」。

事例9 妻の話「アリヒオールガフ式を実施したが、親戚なので経済的な面を考慮して簡単に済ませた。当時二人の訂婚は、二人は通遼市の近くの大林鎮に行き、写真（横5cm縦3cm位の黒白写真）を一枚撮り、洋服一枚買ってきてくれて訂婚になった。当時訂婚写真を撮ったら、結婚が決定した事を示す」。

・結婚披露宴の日取り及びその決定方法

事例8 夫の話「1981年12月12日（旧暦）は結婚披露宴の日で、占い師によって決めてもらった」。

事例9 妻の話「1986年12月14日（旧暦）は結婚披露宴日で、占い師に見せてもらった日である」。

・男性側から女性側に上げたベレグ

事例8 夫の話「400元の現金と洋服2枚あげた。当時普通は200元であったが、妻の両親が400元要求し、当時とても高かった」。

事例9 妻の話「結婚披露宴の半年前に400元の現金と洋服2枚買ってくれた。当時親戚だったのでお金は400元だった。普通は800—1000元だった」。

・当時の物価及び年収

事例8 夫の話「当時私は工場で働いていたので月36元の給料もらっていた」。

事例9 妻の話「年収は4000元—5000元、物価としては、牛一頭80—100元、卵一個7分—8分現在一個1元位、トウモロコシ一斤（500g）2角等である」。

・結婚披露宴に参加した客からもらえるお祝い品

当時現金だったら5—10元くれていた。しかし現金が少なかった。物をくれていたのが多かった。たとえば、洗面器、鏡、魔法瓶、石鹸ケース、タオル等だった。

・当時の婚姻儀礼の基本的な流れ

結婚が決定してから、女性側から男性側の親戚に手作りの靴をつくることから始まる。普通

は、10足から20足用意する。そして結婚日が決定したら、男性側から結婚披露宴三日前に、結婚日を伝えにいく。そしてその日シグスフルゲホを一緒にしていた。筆者の質問「結婚日を三日前に伝えても間に合うの。そして誰が何で行ったの」。事例9妻の話「当時十二月に結婚ということだけを知っていて、日付を知らなかったの、三日前でも大丈夫だよ。旦那、付添い婿、旦那の一番目の兄、二番目の兄が馬車でいった。そしてシグスをフルゲホして食事を済ませてから、旦那の兄たちが帰り、旦那と添い婿が残った」。

男性側から女性側の結婚披露宴に使うシグスが到着後、客を招待し、コックと主宰者を探す。コックは村で料理が上手な人で、主宰者が村でおしゃべりが上手な人である。そして披露宴に使う茶碗、コップ、椅子、机等を村から借り、結婚披露宴の準備をし始める。男性側では結婚が決定後、結婚式の一週間前から、村の仲の好い婦人たちを集め、四枚の式布団や掛け布団をつくる。そして、男性側の男性たちは都会に行き家具、鏡、洗面器、ミシン等を購入する。そして、結婚披露宴の三日前からコックと主宰人を探し、披露宴に使う茶碗、コップ、椅子、机等を村から借りて準備する。結婚披露宴の前日の夕方から、村の若い人たちが集まり、新郎、添い婿に歌を歌わせてもらったり、冗談したりする。そして夜になると四人（新婦、新婦の妹、新郎、添い婿）がオンドルに座り餃子を食べる。次の朝結婚披露宴の開始前に、フルゲンホビチラホ（新郎に洋服をきかせる）をする。その時必ず二人のベルゲンがしてくれる。着がえている途中に、村の若い人たちが来ていろんな邪魔をしたりする。たとえば新郎の靴を奪ったりする。フルゲンホビチラホ後結婚披露宴が始まる。また事例9妻によれば、新郎は新婦を迎えにくることと、フルゲンホビチラホことはモンゴル民族独特の習慣であると言う。翌朝になると、新婦を新郎側に送るのである。事例9妻の話「当時トラクターもなかったし、私を送ると決めた人数は40人近くいたので、馬車で運べなかった。そこで父はトラックを借りて送った。男性側の家についたら、男性側の結婚披露宴が始まる。当日の夜になると、闇洞房が始まる。しかし私たちにはしなかった」。事例9妻の話「モンゴル民族の習慣で世代上の人への冗談を戒める。私たちは村の上位世代（叔父、叔母と呼ぶ）であるため冗談されなかったしなかった」。結婚披露宴三日後に、親戚の人たちが贈り物を持ってくる。すると義理の両親は料理作って招待する。また次の日も披露宴でいろんな役割分担をこなしてくれた人たちも招待する。

D) 1990年代の婚姻儀礼

事例10

新郎の王烏力吉（オウ ウルジ）の結婚年齢23歳で現在42歳、通遼市ホルチン左翼中旗バイシント蘇木オリトデルハンゲル（前徳勝）＝ガチャー農牧民である。

新婦の張春梅（チョウ シュンメイ）の結婚年齢26歳で現在45歳、結婚する前は、通遼市ホルチン左翼中旗ホダング蘇木（会田召）のアバガイルにいた。現在同旗のバイシント蘇木オリトデルハンゲル（前徳勝）＝ガチャー農牧民である。

事例11

新郎の華銀龍（カ インロウ）の結婚年齢23歳で現在37歳通遼市のスーパーに働いている。

新婦の韓紅霞（カン コウカ）の。結婚年齢23歳で現在37歳通遼市で個人の床屋を営営して

いる。二人はもともと通遼市ホルチン左翼中旗バイシント蘇木オルトマンハ＝ガチャーにいたが、2010年から通遼市に出稼ぎに行った。

・結婚相手を知り合ったきっかけ

事例10夫の話「私たちは仲人によって知り合った。アバガアイルに私の親戚がいたので、紹介してくれた」。

事例11妻の話「小学生、中学生時代の友達であり、二人とも高等学校に行かずに、田舎で親の農業を手伝っていた。23歳の結婚する年齢になると、華銀龍は以前から私のことずっと好きでしたので、親に頼んで仲人を私の家に行かせた」。

・アリヒオールガフ式を実施するか否か

事例10夫の話「アリヒオールガフ式は、実施しなかった。知り合って半年もなく結婚した」。

事例11妻の話「アリヒオールガフ式は実施した。1999年7月に行った」。

・結婚披露宴日取り及びその決定方法

事例10夫の話「1995年12月で（旧暦）、母は占いをできるので、よい日を見て、決定した」。

事例11妻の話「2000年の12月20（旧暦）である。占い師のところに行って、決定してもらった」。

・男性側から女性側に上げたベレグ

事例10夫の話「現金4000元あげ、四種類の衣類、自転車買ってあげた」。

事例11妻の話「現金8000元四種類の衣類、金のアクセサリ、指輪等を渡した」。

・当時の物価及び年収

トウモロコシ500gは3角から5角、卵一個2角、事例10一家族の収入は、8000元位。事例11の一家族の一年の収入は、1万5000元位であった。

・結婚披露宴に参加されたお客様からもらったお祝い品

現金と物であった。親戚の人は50元で、一般人は20元位でした。当時物を送ったのは少なかった。私（事例11の妻）はオバから炊飯器をもらった。

・当時の婚姻儀礼の基本的な流れ

結婚が決定後、女性側では男性側の親戚の農業する際に履く手作り靴を10足から20足位準備する。結婚披露宴の日が近づくと、女性側の結婚披露宴を準備し始める。たとえば添い嫁、コック、主宰者を探す。結婚披露宴二日前に、コックと主宰者、親戚の男性の方は披露宴に出す料理を計画する。そして結婚披露宴前日になると、親戚の女性と友人が野菜を洗ったりする。また親戚の若い男性の方は、村の親戚や友人の家に行き、披露宴に使う茶碗（いろんな種類の茶碗）を集める（披露宴後返す）。男性側では、新夫婦に新しい敷き布団や掛け布団を二枚ず

つ準備する。それを準備する際、義理の母の親戚の方、仲の良い友人が手伝いに行く。また添い婿、コック、主宰者を探す。そして結婚披露宴の準備は女性側と同じである。添い嫁は、新婦と同じ年齢か年下で結婚していない女性であれば、誰でもいい。しかし新婦の友人あるいは妹が担当するのが一般的である。私（事例11妻）の添い嫁は小学生時代の友達だった。役割は、結婚式当日の世話人である。添い婿も添い嫁と同じ種類の人を選ぶ。旦那（事例11夫）の添い婿は旦那の親戚の弟だった。役割は新婦側の披露宴に新郎と一緒に来て、新郎が新婦側の親戚にタバコを勧めると、火をつけてあげたりする細かい手伝いをしてあげたりする。また新婦側の披露宴の夜になると、歌を歌わせたり、踊りさせたりしてよくいじめられるのである。当時村に何人かの有名なホゴルチン（四胡を弾く人）がいたので、十人位の人が集まってホゴルを弾きながら民族歌を歌い、女性たちは踊っていた。当時とても賑やかであった。次の日になると、新婦を新郎側に送る、当時トラクターで送った。当時四輪車に新郎、添い婿が新婦を囲んで座り、親戚（筆者も含めている）、友人全員二十人位で送った。

5. 考察

前述のように、筆者は、内モンゴル自治区通遼市ホルチン左翼中旗を中心に、1950年代から1990年代までの婚姻儀礼の流れやその各要素に関して、聞き取り調査を実施した。なお1950年以前の婚姻儀礼に関する聞き取り調査については、インフォーマントが存在していないので、前述したフリーランドの1920年代の婚姻儀礼に関する研究と青木富太郎の1940年代の婚姻儀礼の重要な要素となる男性側から女性側にあげる婚資に関する研究を参考にした。

筆者は上述したように、1950年代のモンゴル民族の婚姻儀礼については、内モンゴル自治区通遼市ホルチン左翼中旗を中心として調査を実施した。しかし先行研究となるフリーランドの1920年代の婚姻儀礼および青木富太郎1940年代の婚姻儀礼は、それぞれ現在のモンゴル国ゴビアルタイ県のナロバンチン寺領における事例と内モンゴル自治区包頭市ダルハン・モーミヤンガン旗における調査事例である。筆者が本稿で取り扱った前述の1920年代の事例と1940年代の事例は、筆者の調査地とかけ離れた地域であるが、遊牧生活様式を取っていたモンゴル民族は、地域の区別なく各習慣、文化に大きな違いがないと考える。ブレンサインの研究によると、通遼市ホルチン左翼中旗は蒙地開墾により、1920年代から徐々に、もともと遊牧民であったモンゴル民族が多民族と混住し、半農半牧生活様式を取るようになった。

前述したような、歴史的な背景を持つ半農半牧生活様式の通遼市ホルチン左翼中旗におけるモンゴル民族の婚姻儀礼は、既述した1920年代および1940年代の遊牧生活様式の地域におけるモンゴル民族の婚姻儀礼とどのような相違点を持つのかを以下に検討していきたい。

婚姻儀礼の流れからみていくと、結婚相手同士が知り合う段階から結婚披露宴までの基本的な流れに大きな変化は見られないと思われる。たとえば、何れの年代でも結婚相手同士が仲人を通して知り合い、面会もできずに結婚ましていた。特に、青木富太郎は婚資についての研究を主とし、結婚披露宴までに男性側から女性側に、婚資をあげるが、女性側も男性側に婚資をあげるのである。しかし、女性側がそれをあげるのは、結婚後2～3年後である。それは、当時結婚相手同士が面会でできずに結婚した結果、2～3年後の離婚率が高かったことが明らかに

なっている。婚資についての比較は、後述する。

また結婚披露宴の日取りを決定する際、何れもウゾーチの所に行き、めでたい日を見てもらっている。フリーランドと青木富太郎の研究では、結婚披露宴の時期や日付を提示していないが、筆者の調査では、農作業の時期を避け、農業が始まる前の4月と農業作業が終わった12月ごろに結婚披露宴を実施している。それも半農半牧地域の結婚披露宴の日取りの特徴ではないかと思われる。その日取りを決定する詳細的な説明は、1950年代から1990年代の婚姻儀礼を比較する際、更に検討していきたい。

男性側から女性側にあげるベレグからみていくと、1920年代には、主に家畜で、生活が貧しい家は、少なくとも1頭の羊で、裕福な家の場合、9頭の馬か各種の家畜を混ぜて9頭あげる（フリーランド1990）。1940年代には、平民の場合は、馬2頭、牛2頭、羊20頭以下で、非常に貧しい平民はハダック（絹布）だけの場合もある。貴族の場合は、馬2頭、牛2頭、羊20頭、馬蹄銀20個（羊20頭相当）あるいは金100元である（青木1952）。1950年代には、4人のインフォーマントそれぞれ、現金150元、牛1頭、洋服を作る布8枚、400元である。前述した1920年代、1940年代、1950年代の男性側から女性側にあげたベレグを比較してみると、1920年代と1940年代の方が明らかに家畜の種類が多い。しかし1950年代のベレグには、現金か洋服の布が圧倒的で、家畜は少ない。半農半牧地域のモンゴル民族においては家畜の数が少ないので、婚資に現金や物になったが、それは遊牧生活様式から半農半牧生活様式に変化した結果ではないかと思われる。

以下では、1950年代から1990年代までの通遼市ホルチン左翼中旗を中心としたモンゴル民族の婚姻儀礼に関する筆者聞き取り調査について考察していきたい。

・1950年代から1990年代までの婚姻儀礼の連続性

①婚姻儀礼の基本的な流れは変化していない。

事例1から事例11までの各年代の婚姻儀礼の流れに変化が見られない。例えば、結婚が決定してから女性側が手作りの靴を用意し、そして結婚披露宴の日取りが決定した後、シグスが到着してから女性側の結婚披露宴の準備をするという一連の流れはどの年代でもほとんど同じである。男性側でも掛け布団や敷き布団をつくり、結婚披露宴の準備をする。そして女性側の結婚披露宴の前日に、新郎と添い婿が女性側に到着すると、次の日に結婚披露宴が始まるが、始まる前に、フルゲンホビチラホをする。当日の夜は、歌を歌ったり、踊ったり、ホゴルを弾いたりして賑やかに過ごし、翌朝、新婦を新郎側に送るという流れも同じである。

上述のように1950年代から1990年代までの婚姻儀礼の流れに変化がないことが明らかである。勿論、各年代の婚姻儀礼の流れの要素においては変化がみられているが、それについては後述する。

②結婚披露宴の日取りをウゾーチにより、決定してもらっている点にも変化がない。

事例1から事例11までのそれぞれインフォーマントの聞き取り調査の中で、結婚披露宴の日取りの決定方法はいずれもウゾーチに決めてもらっている。文革時代には迷信や民族行事等をすべて禁止されていた。事例5、6、7は文革時代の時の婚姻儀礼で、当時ウゾーチの存在そのものが禁止されていた。しかし当時はみんな陰に隠れてウゾーチに結婚披露宴のめでたい日を

占ってもらっていた。結婚披露宴は、何よりも重要であるので、必ず吉日を選んでい。1950年代の結婚披露宴の日取りは、春の時期3月と4月、そして秋冬の時期の10月と12月になっているが、1950年代以降の結婚披露宴の日取りは、ほぼ12月になっている。その原因を事例9の妻に尋ねると、農業を全部済ませるのは10月中旬ごろで、農作物を売り収入が入るのが11月ごろになる。そこで農民たちは12月ごろに余裕が出て、結婚披露宴を実施するのである。しかも婚姻披露宴を行う月日は必ず愚数であり、月の始まりに行うのが一般的である。だから奇数の月か、月末に儀礼を実施する人はほとんどいない。その上、日付も2, 4, 6, 8などの偶数の日に行うが多い。以上のことからみると、ウゾーチにめでたい日取りを決めてもらうが、それが農業作業の時期を避けていること明らかで、半農半牧地域では、農業を中心としていることが窺える。

③各年代の男性側から女性側にあげるベレグの割合が変化していない。

以下では、1950年代から1990年代までの婚姻儀礼に男性側から女性側にあげたベレグ、物価、年収を表で作成し、各年代の婚姻儀礼に使う料金の割合を推測していきたい。

	事例	ベレグ	物価	年収
1950年代	事例1	150元	お酒一斤(500g)7角, 牛一頭70元—80元	・収入なく自給自足 ・事例4の年収は1000元
	事例2	牛一頭		
	事例3	8枚の洋服作る布		
	事例4	400元		
文革時代 (1966—1977)	事例5	500元	卵一個6分, 豚肉一斤は(500g)3角—5角位	・事例5の月給50元 ・事例6, 7は生産隊に働き年収は, 2元—10元
	事例6	200元と3枚の洋服作る布		
	事例7	700元		
1980年代	事例8	400元の現金と洋服2枚, 当時普通は200元	牛一頭80—100元, 卵一個7分—8分	・事例8の月給は, 36元 ・事例9の年収は4000元—5000元
	事例9	400元の現金と洋服2枚, 当時普通は800—1000元		
1990年代	事例10	現金4000元, 四種類の衣類, 自転車	トウモロコシ一斤(500g)は3角—5角, 卵一個2角	・事例10の年収は, 8000元位 ・事例11の年収は, 1万5000元
	事例11	現金8000元, 四種類の衣類, 金のアクセサリ, 指輪		

上の表から分かるように、男性側から女性側にあげるベレグのみが、当時の年収を上回っていることが明らかである。そして結婚披露宴を実施するまでの過程では、年収の何倍も多い相当なお金をかけて、結婚していたことが分かる。筆者は、それぞれのインフォーマントから当時収入がなし、あるいはごく少ない状況のもとで、どのようにして結婚していたかという疑問をいただき、質問した結果、当時家畜、畑から儲けたお金を貯金して、結婚の際に使用していたのである。また、娘がいる人たちは、娘を結婚させる時、もらったそのベレグを残し、息子の結婚の際に使用していた。

上述のことから、婚姻儀礼が昔から現代まで、社会的に重要な位置を占め続けてきたことがわかる。また娘の結婚の際にもらったベレグを、娘にあげないで息子の結婚にまわしていたことから、男女差別の存在がみてとれる。

④婚姻儀礼において村全体の互助的な関係が変化していない。

各年代の婚姻儀礼の流れでは、男性側および女性側で結婚披露宴を実施する際、村の親戚や友人たちから披露宴に使う道具などを集め、また彼らも自主的に手伝いに来てくれた。当時は結婚披露宴を実施するのが村全体の行事となっており、村自体が密接な互助関係の存在するコミュニティとなっていたことが分かる。

以上のように婚姻儀礼の連続性を4つの側面で考察した結果、結婚披露宴が何れの年代においても相当なお金をかけて実施されており、社会的に重要な位置を占めている事が明らかである。そしてそれが、村全体に互助関係がみられるコミュニティとなっていたことも分かる。

・1950年代から1990年代までの婚姻儀礼の変化

①新婦を新郎側に送る際の交通手段の変化。

筆者の聞き取り調査では、新婦を新郎側に送る際、1950年代には、牛車であり、文革時代には、馬車になり、1980年代に馬車あるいはトラック（自分持ちではなく、公社から借りたのである）になり、1990年代にはトラクターになった。このように、各年代の交通手段の変化から農作業がだんだん機械化してきたこともわかる。郝重明・包智明の研究では、中国政府の1980年代に土地改革で生産隊の土地を農民たちに平均分配し、農民たちの働く積極性を高め、収入を大幅に増大させた（郝・包2010）。こうして、農民たちは自分の土地を持つようになり、年々の豊作により、牛馬による農耕よりもトラクターによる農耕の重要性が高まったのではないと思われる。

②アリヒオールガフ式が実施する場所の変化。

青木富太郎の研究では、男性側から女性側にこれらの婚資をあげる際、女性側の親戚や友人を招待し、羊肉の塩ゆでと牛乳酒で御馳走してあげる。そして、1950年代および文革時代は全て女性側で、アリヒオールガフ式を実施し、親戚や友人などを招待してご馳走するのみだった。当時結婚相手同士の訂婚をし、お金かけたり賑やかにすることはなかった。しかし1980年代後半以降から男性側でアリヒオールガフ式を実施するようになり、村人を全て招待し、賑やかに行うようになった。男性側がアリヒオールガフ式を賑やかに行うようになったのは、既述した1980年代の土地改革政策との関係が大きく、農民たちの生活水準が高くなったことが窺える。そしてアリヒオールガフ式の場所の変化は、1980年代以降女性の地位が上がったことがその要因ではないかと思う。その原因については、次の④の、結婚相手を決める際の親の関わり方の変化の所で、詳しく論述したい。

③結婚披露宴に客からもらうお祝い品が物から現金への変化。

お祝いの品に関して、1980年代までは結婚披露宴に来る客は、みんな日常生活に使う物をあげ、1980年代には、現金と物をあげ、1990年代にはほぼ現金をあげるようになってきている。上に示した表からも分かるように、1980年代以降、農民たちの間で現金の収入が増えている。ゆえに、村内の重要な行事に現金を回すようになったのではないだろうか。

④結婚相手を決める際、親の関わり方の変化。

1980年代半ば以前は、事例でみた提示しているように親が結婚を決めていた。本人が結婚相手を気にいらなくても、親が気にいれば無理やりに結婚させていた。しかし1980年代半ば以降

になると、結婚相手を本人の意思で探す事もよくみられるようになった。当時は親が結婚相手を気にいらず、反対する者もいたが、稀であった。その理由は、娘を無理やりに結婚させ、莫大な礼金をもらって、息子の結婚や自分のために使っていた親は、自分の娘の結婚生活が幸福ではなく、夫に暴力を受ける等の悲惨なことが頻繁に起こるようになったり、また1980年代後半になり、生活も比較的豊かになっていくにつれ、自分自身でも反省するようになった。また1980年代後半に、人々が経済的に豊かになっていくとともに、精神的にも開放されつつあった。それで、ホゴルタタホ（三胡を弾く）人が増え、それに内モンゴル東方地方の民謡を合わせて歌う事が流行するようになってきた。その民謡は、昔の悲惨な婚姻のことをモンゴル東方地方の言葉で歌い、無理やりに結婚させたことの悪影響や悲惨な結果を皮肉って歌っていた。そして当時テレビが普及し、テレビから恋愛のことなどいろんな情報が得られるようになり、人々の思想が解放されてきたと思われる。以上のような理由により、1980年代後半から、親が娘や息子の結婚相手を決めなくなり、結婚する本人が自分の好きな人を選ぶようになっただろう。

以上のように婚姻儀礼の変化を4つの側面で考察した結果、婚姻儀礼の各要素の変化は、1980年代の土地政策により経済的に豊かになったことと大きく関係しているようである。それらの変化の中で、婚姻に対する親の関わり方の変化の原因は、経済的な変化だけでなく、人々の思想面での開放も重要な原因となっているのである。

6. おわりに

以上のように筆者は、フリーランドの1920年代の婚姻儀礼および青木富太郎1940年代の婚姻儀礼、1950年代から1990年代までモンゴル民族の婚姻儀礼について考察した。その結果、1920年代から1950年代までは婚姻儀礼の基本的な流れに変化が見られないと思われる。しかし婚姻儀礼の中で、男性側から女性側にあげるベレグからみると、1920年代や1940年代の方が明らかに家畜の種類が多いのである。それと反対に、1950年代以降は現金や洋服の布が圧倒的で、家畜は少ないのである。半農半牧地域のモンゴル民族においては家畜の数が少ないので、婚資に現金や物になったが、それは、遊牧生活様式から半農半牧生活様式変化した結果ではないかと思われる。

また1950年代から1990年代までの婚姻儀礼の連続性を4つの側面で考察した結果、結婚披露宴を何れの年代でも相当なお金をかけて実施しており、社会的に重要な位置を占めている事が明らかである。そしてそれが、村全体の互助関係を示していることも分かる。そして婚姻儀礼の変化を4つの側面で考察した結果、婚姻儀礼の各要素の変化は、1980年代の土地政策により、経済的に豊かになったことと大きく関係していることが分かる。また、婚姻に対する親の関わり方の変化の原因は、経済的な変化だけでなく、メディアの影響や生活レベルの向上により、古い価値観や伝統的な価値観から次第に自由になったことも重要な原因となっているのである。

筆者は本稿で、1950年代から1990年代までの範囲で聞き取り調査を実施したが、1990年代から現代までの婚姻儀礼の変化を取り扱うことができなかった。筆者の知っている限りでは1990年代から現代までの婚姻儀礼は、今までと違う変化を辿ってきていると思われる。それゆえ、筆者は今度通遼市ホルチン左翼中旗で実際に婚姻儀礼に参加し、聞き取り調査を実施する計画

をしている。またモンゴル民族の婚姻規制には、イトコ婚というハゴチンオイラギシンオイラボラガホ（古い親戚を新しい親戚にさせる）というイトコ婚があるが、今後イトコ婚の形態や婚姻方法の実態とその変遷に関しても検討していきたいと思う。

参考文献

日本語

1. 青木富太郎1952「内モンゴルハルハ右翼旗の結納, 持参物—特にウムチ・ホビ関係の習慣」『遊牧民族の社会と文化—ユーラシア学会研究報告』 pp.113-128
2. 伊賀上菜穂2013『ロシアの結婚儀礼—家族・共同体・国家』彩流社
3. 王桂蘭2012『中国内モンゴルにおける生業変化に伴う文化変容』岡山大学大学院社会文化科学研究科提出博士論文
4. 兼城糸絵2009「漢族の婚姻儀礼の持続と変化に関する一考察—福建省福州市の事例から—」『沖縄民俗研究』第27号 pp.68-94
5. 小坂みゆき2011「中国朝鮮族における婚姻儀礼の変化」『北海道大学大学院文学研究科研究論文集』第11号 pp.51-66
6. フリーランド 愛宕松男訳1990「西北モンゴルナロバンチン寺領における遊牧モンゴルの経済・社会生活」『キタイ・モンゴル史』三位書房 pp.375-473
7. ボルジギン・ブレンサイン2003『近現代におけるモンゴル民族農耕村落社会の形成』風間書房

中国語

1. 策・哈斯毕力格图 2006『鄂尔多斯婚礼』内モンゴル大学出版社
2. 郝亚明・包智明 2010『体制政策与モンゴル族乡村社会变迁』中央民族大学出版社
3. 吉国秀 2005『婚姻礼仪变迁与社会网络重建—以辽宁省东部山区清源镇为个案』中国社会科学出版社
4. 陶健ほか（編）2006『内モンゴル区情』内モンゴル民族民出版社

原稿受領日：平成25年10月2日；Received 2 October 2013

掲載受理日：平成25年11月12日；Accepted 12 November 2013